

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	津田由加子
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 初田隆 副主査：（岡山大学教授） 泉谷淑夫 委員：（兵庫教育大学教授） 高木厚子 委員：（上越教育大学教授） 松本健義 委員：（兵庫教育大学准教授） 大西久
3. 論文題目	幼児の造形活動における主体的活動を促す動機づけに関する研究 —保育者と子どもの意識のずれに着目して—
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 津田由加子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年2月11日（土）10時55分～11時15分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 第2講義室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>学位論文の構成は以下の通りである。</p> <p>序 章</p> <p>第1章 幼児の造形活動における保育者と子どもの意識のずれについて</p> <p>第1節 ずれに着目する意義</p> <p>第2節 実践事例1「かなへびくんのあかいながぐつ」の絵をかこう</p> <p>第3節 実践事例2「フライパンで何つくる？」</p> <p>第4節 実践事例3「かたつむりをつくろう」</p> <p>第2章 幼児造形におけるずれの修正過程としての歴史の変遷～明治期から平成期まで～</p> <p>第1節 明治期における保育者と子どもの意識ずれ</p> <p>第2節 大正期における保育者と子どもの意識ずれ</p> <p>第3節 昭和期（戦前）における保育者と子どもの意識のずれ</p> <p>第4節 昭和期（戦後）における保育者と子どもの意識のずれ</p> <p>第5節 平成期における保育者と子どもの意識ずれ</p> <p>第6節 まとめ</p> <p>第3章 幼児の造形活動における動機づけの現状と課題</p> <p>第1節 倉橋惣三の動機づけ理論</p> <p>第2節 幼児の造形活動における指導言のあり方について</p> <p>第3節 動機づけにおけるほめ言葉の現状と課題</p> <p>第4章 活動の連続性をもたせるための動機づけを意図した実践</p>

第1節 幼児の造形活動における動機づけ

第2節 内発的な動機づけを意図した言葉がけによる導入

第3節 3つの動機づけモデルについて

第4節 活動に連続性をもたせる動機づけ実践

終章

研究の概要は以下のとおりである。

本研究の目的は、幼児の造形活動における「保育者と子どもの意識のずれ」に着目し、実践事例の分析を行うとともに、明治期よりの幼児造形の変遷をたどり、ずれの起こる原因や類型、またずれをどのように捉え修正しようとしてきたのかを考察すること、そして、ずれを修正していくための有効な手段を「動機づけ」に求め、幼児の主体的な活動を促す動機づけのあり方を検討することである。

第1章では、まず上田薫の『ずれによる創造性』より、ずれの創造的な意義について確認したうえで、教師と子どもとの間に生じる意識のずれについて、①教師の願いはどのようなものであったか、②ずれの生じた場面、ずれの様相、ずれの類型、そして③教師はずれに対してどう対応しているか、また④教師のずれへの意識はどうか、といった点から実践事例の分析を試みている。結果、保育者のずれへの意識と修正の試みを、①ずれの認識はあるが、修正することを放棄している場合、②ずれの認識はあるが、原因が理解できず修正する方法もわからない場合、③ずれ自体の認識がなく、むしろ自分の理想の作品に近づけたことに満足感を覚えている場合、④ずれを認めず計画通りに進めていくのが当たり前というように自らの指導を正当化している場合などに、類型化することができた。

第2章では、明治期より現代にいたる幼児の造形教育の歴史を、ずれの生成と修正の過程という視点から概観している。『幼児の教育』誌（明治34年創刊）に掲載された研究者の論文や実践報告から、それぞれの時代に行われていた造形活動の実践を抽出することによって、造形活動における保育者と子どもの意識のずれの様相がどのように変化していったのかを検討している。画一的・注入主義的な保育から子どもを主体とした保育へと、ずれの修正・改善が図られてきたものの、現在の幼児造形教育の現状としては、マニュアル書に示された内容をなぞる保育や、園で定められた型どおりの保育が行われる傾向が強く、子どもとのずれは拡大しているにもかかわらず、その認識はなく、多くの保育者が見栄えのよい作品を作らせることに満足している状況となっていると考えられる。教師主導の保育から子どもを主体とした保育への転換には、「動機づけ」への着目が一役を担っていることを確認するとともに、現代におけるずれの状況と改善への方途を示している。

第3章では、教師の指導言とほめ言葉に着目し、実践事例の分析を行うことで、動機づけの現状と課題について検討している。保育者が用いるほめ言葉には①意欲を持たせる、②保育者の考える理想の作品に近づける、③認める・受け入れる、④考え、気付かせるといった意図が含まれており、一方で直接的なほめ言葉だけではなく、比喩的な表現を使って子どもたちを考えさせたり、子どもたちが発言した言葉に共感的な姿勢を示したりといった働きかけが、子どもの動機づけを促していることが確認された。

また、ずれを修正する指導言は子どもの動機づけとして機能すること、そして動機づけは導入段階はもちろん、活動全体を通して様々な場面で有効に機能させる必要があるという課題が確認された。

第4章では内発的動機付けについて、「他者受容感」、「自己決定」、「有能感」、「知的好奇心」という4つの観点から整理したうえで、内発的動機付けに着目した授業実践例の考察を行っている。子どもの興味・関心・必要感、子どもの意識の流れなどを十分に考えたうえで、①意欲を高める、②必要性を与える、③想像を働かせる、という3つの要素に基づく言葉がけを用いることによって、内発的動機づけが働き、意欲的・連続的な活動が生み出されることが確認された。続いて、6ヵ月間にわたる実践（「新幹線をつくろう」「新幹線を見に行こう」「乗ってみたい新幹線をつくろう」）を、新井の3種の動機づけモデルをもとに考察し、活動に連続性をもたせる動機づけの在り方を示している。様々な場面で動機づけを意識した言葉がけや環境設定などを行うことで、次の活動への意欲が高まり、活動が連続的に展開されていき、以下の成果が認められた。またそれらが相互に作用することで子どもが一層意欲を高め、更に次の活動へと発展していく様子が確認された。

- ① 経験の連続性が生まれたこと
- ② 造形能力の高まりがみられたこと
- ③ 社会体験活動へと発展したこと

終章では以下の課題について述べている。

- ①倉橋は「動物園」や「八百屋」、「こいのぼり」など、子どもの興味や関心、生活と結びついた主題を選定し、それを基軸に子ども主体の活動を展開させてゆく「誘導保育」を提唱していたが、現代では子どもを取り巻く環境が大きく変化しているため、現代の子どもたちの興味・関心・必要観に即応し、生活と結びついた主題を選び活動展開を構想する必要があること。
- ②本研究では子どもの内発的動機付けを促す指導言や褒め言葉の考察を行ったが、作品見本や示範の提示、動作や周辺言語などの指導言以外の保育者のパフォーマンス、また環境設定のあり方など、保育を構成する諸要素について検討し、それぞれ効果的な方法を見出していくこと。
- ③「新幹線」の実践では、子ども同士、子どもと保護者、駅の職員などとの間でコミュニケーションが活性化することで、子どもの意欲が持続し活動が発展していく様子が観察されたため、グループ活動などの保育形態や、園外の方との交流の効果などについて検討し、活動に取り入れる方途を探ること。

2. 審査経過

(1) 独創性

造形活動における保育者と子どもとの意識のずれに着目し、ずれの修正として保育の改善を捉え、また、幼児造形の歴史をずれの修正過程という視点から考察することによって現代的な課題を導出するといった点に本研究の独創性がうかがえる。また、幼児造形における研究は、子どもの側に焦点を当てたものが多く、保育者の「指導」を対象としたものでは、マニュアル的な指導法研究に偏りがちであったが、本研究では、新井の内発的動機づけモデルを用いて活動の構成や指導、環境設定等を行うことで、子どもの主体性を引きだし、活動の連続性を生み出そうとしており、独創性のある実証的研究となっている。

(2) 発展性

本研究では、倉橋惣三の「誘導保育」を現代的な課題設定のもとで構想・実施し、改めてその意義化を図ろうとしており、倉橋惣三研究としての今後の深化発展が期待される。また、今後幼児造形における「誘導保育」の実践を重ねていくことで、「お土産保育」と呼ばれる

ような簡便な造形指導を排し、生活と結びついたダイナミックな活動をうみだしてゆくことが期待される。

(3) 学校教育の実践への貢献

本研究で示された、幼児の内発的動機付けを促す指導言や褒め言葉、また、幼児の活動意欲を持続発展させてゆくための主題設定や活動展開の方法などを取り入れることによって、今日の幼児造形において広範にみられる作品主義、マニュアル的な指導を見直し、子どもの主体性を引き出すための保育の改善が期待できると考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、津田由加子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。